



AAINews

人と農と環境をつなぐ技術を考える

カラモジャ訪問記

カラモジャ地域はウガンダ北東部に位置しており、筆者が活動しているアチョリ地域の東側に隣接している。国土の中でも特に乾燥が進んだ半乾燥地帯であり、住民の多くは牧畜中心の生活を営んでいる。

アチョリから東へ車を走らせると、まずカラモジャ地域のアビム県に入る。穏やかな緑が広がる風景は、岩山が目に入るほかは、東部アチョリと大きく変わらない。しかし、アビム県も半分を過ぎると草丈が短くなり、徐々に茶色を帯びてくる。目的地であるコティド県に入るころにはアカシアの木々が広い空の下に散らばる風景へと変わった。筆者が訪問した 11 月は乾期の始まりであるにもかかわらず、川はすでに干上がり、白く乾いた川床が見えていた。人影もまばらになり、風景は荒涼感を帯びていく。



水が無くなり、川床がみえる

その一方で、たまにすれ違う道行く人々はこちらに向けて手を振ってくれる。カラモジャでは武装団による強盗や牛の盗難など緊張感のある話を聞くことが多い。アチョリ側でも武装したカラモジャの牛窃盗団が地域の問題になっていたため、少し身構える気持ちもあったが、その素朴なしぐさは筆者の緊張を和らげるものであった。



人懐こい子供たち

今回はプロジェクトの野菜生産専門家としてスタッフとともにコティド県を訪問し、農業普及活動および農家の営農状況を 3 日間にわたって調査した。同県の農業普及所によれば、2022 年の干ばつは、人々に深刻な食料不足をもたらしたとのことである。現在も食料確保が最優先課題であり、住民は年 1 回しかない雨期にはソルガム、ミレット、リョクトウなど主食作に集中せざるを得ない状況にあるという。

農家の話で印象的であったのは、干ばつで多くの牛を失ったことを契機に、これまで牧畜中心であった男性たちが家庭で過ごす時間が増え、農業に関わり始めたという変化である。これまで女性の仕事であった農業に男性も取り組むことで食料生産が増え、さらに家族と過ごす時間が増えたことで、家庭内暴力も減ったという声もきかれた。

男性にしても「牛追いをしていたころは野宿をし、牛の乳や血で飢えをしのいでいた」「今は家庭で調理された食事が食べられる」「牛強盗による身の危険もなくなった」と語っていた。後日、ケニアで活動する専門家と話したところ、同様の変化はケニアのマサイ族でも確認されているとのことであった。もしかすると、東アフリカの牧畜民族は、大きな歴史的転換期を迎えているのかもしれないと感じた。

一方で、カラモジャ地域の農業生産性はまだ低く、人々の生活はまだまだ豊かとも安定しているとも言えない。彼らの農業は新たな挑戦の途上にある。牧畜を中心に続いてきた暮らしが、ゆっくりと農業へと歩みを進めている。その変化に今後も注目していきたいと思う。

(2025 年 12 月 澤田)